

幼児教育実践の諸問題



松 村 康 平

幼児教育実践上の主要な課題は、幼児の人格形成である。この課題解決の過程に成立するいくつかの問題について、述べることにする。

幼児の(乳児を含む)人格形成は、自己との関係・人との関係・物および仕事との関係の発展における過程である。幼児の人格形成とは、自己・人・物および仕事との関係状況における幼児の関係の仕方が、諸関係の発展をもたらすように形成されていくことである。

この自己や物および仕事との関係は、はじめ、人との関係の発展に担われて発展する。自己や物および仕事との関係に焦点をあてていえば、それらの関係が、人との関係に媒介されて発展するということである。

身近な人、たとえば両親や保育者の動作や表情、言語などによ

る、その「人との関係」の発展を媒介として、自分の身体の機能や自分の情態・意識などの「自己との関係」、物理的事物が衣服とかコップやサジなどとしての意味をもつようになったり、物の機能的性質が明確化していく「物との関係」、課せられる「仕事(たとえば事物の操作)との関係」などが、発展する。その意味で、幼児との関係を担う人の、関係の仕方、関係の発展をもたらす役割のとり方は、幼児の人格形成にとって極めて重要である。

幼児との関係を担う人、たとえば保育者は、幼児との対人関係の仕方ばかりでなく、その人の物および仕事や自己との関係の仕方、その関係の発展が、幼児の人格形成にとって重要なこともまた、認識している必要がある。

保育者は、物との関係を媒介として、幼児との、また、幼児たち同士の間人関係の発展がもたらされるようにしたり、自己との

関係を媒介として、幼児と物との関係の発展がもたらされるようにして、実践活動をたかめることのできる人でなければならぬ。これは、幼児の人格形成のための「教育技術」に関する問題であり、たとえば、「物媒介対人関係発展の技法」「自己媒介・物関係発展の技法」などとして意識化され、体系化されていくべきである。

幼児の人格形成は、諸関係の発展における過程である。幼児の自己関係のみを中心に、あるいは、保育者の目的志向活動のみを中心に展開される過程ではない。保育者には、幼児に関する諸関係の展開を認識して、実践活動をすすめることが、期待されている。この認識の成立に役立つと考えられる関係展開の様相を、次に「幼児画」に即して述べる。（日本保育学会会報、昭和四十二年五月発行掲載の所説を引用する。）

紙とか土・砂などの「物」と「自分」の手との関係展開の様相が、物の表面に記録される。この記録は、物および自己の性質の關係に規定されている。はじめは、自分と物との接触運動の記録で、手の動きやすさ・表面のすべり具合・使われる道具（じかに手が使われる場合はその道具的性質）の記録度に規定されて、「線の乱れ模様」ができる。それが「なぐりがき」としばしばよばれるのは、幼児を中心に、その自己関係の発展として幼児画をとらえる立場が主となるからである。

「線の乱れ模様」をつくる幼児の自己と物との関係展開には、子どもと共にいる人の仲立ちを必要とすることが多く、その機会がないと、絵をかかないようになる。保育者との関係の発展を、重視せねばならない。

乱れ模様が続いて、手を通しての自分からの働きかけ、表面の空間における位置のとりやすさ、道具に加えられる力加減による使われ方などに規定されて、空間に特定の場所を占めることでつくりだされる、濃淡のある「形態の記録」がみられる。これはしばしば「位置づけ」と呼ばれる。

この形態に、自分から働きかけたことの意味づけをしようとする活動と相まって、たとえば、おとながその形態についてたずねると、ブーブー（自動車）などと名づける。そして、その次からは、ブーブーといいながらいたりする。それが、名づけられる形態とかけ離れると、つぶやきがとまり力を加えてクレヨンを使ったりする。そこで、物との関係の発展がとまることにもなる。

この幼児との関係を担う保育者は、つくりだされる形態の意味を問うことより、幼児の自己と物との関係がさらに発展するように、紙を与え、使いこなせる道具が選ばれるようにし、その使い方に関心をくばることが、たいせつである。

次に続いては、自己と物との関係で自己を物に定着させる活動が著しくなり、表現したい心像が輪郭のはっきりした形で、画面

の空間に配置される。「図式画」とよばれる。続いて、画面および道具の性質による規定はほぼ同様であっても、自分からの働きかけが変わることによる、物と自己との関係の展開が、画面に記録される。絵に絵が重ねられたり、視点をかえての絵がならんでかかれたり、紙を与えれば次々に幾枚もの絵がかかれる。物語りながらの絵がかかれ、自分にもほかの人にも「見せる絵」がかかれる。馬に乗る人の向こうの足や一寸法師のおわんのなかにも、足がすいてみえる。「レントゲン画」ともよばれている。

これに次いで、物と自己との関係の展開の限度、たとえば三次元の世界を二次元であらわすことや、かかれる心像の性質、たとえば人形や花などが実際にあるかたちや色などに規定されて、かかれつくりられていく物との関係の展開が、記録される。それは、「写実画」とよばれるようになってくる。つくりながらつくるものに規定されて、写実に近づいていく。保育者は、その絵が、豊かな生き生きとした生活の表現画でもあるように、生活指導をすすめること、実物をよくみてかく態度を育成すること、ほかの人への伝達やその鑑賞に連なる作品のうまれる評価をすることなどにより、幼児（児童）画の発展がもたらされるようにしたい。

幼児の人格形成には、諸関係のどのような発展が望ましいか。

この、教育実践上の課題は、「評価活動」がなければ解決できない。評価活動とはどういうものか。（本誌「幼児の教育」昭和四

十年三月号掲載の所説を引用して述べる。）

評価は、関係の内外的領域および関係の明確化に役立つ、関係展開活動である。むしろそのような関係の展開を、評価活動とよぶのである。

評価は、その活動に参加するものの「関係わく」を明確化する。この明確化は、それまでは関係的に存在しているものにおける関係の分離をさそい、関係の離脱をも生じさせる。このような評価活動の結果に関する予測が成立し、関係の回復・発展への対策がたてられている評価活動でなければならない。予測的認識の成立と、結果状況に対処する技法が、不可欠である。その認識と技法は、関係わくの明確化にともなう「わくづけ」の閉鎖性がわく外関係との発展をもたらし、また、「わく内関係」の集中・層化傾向にともなう「勾配関係」固定化に、力動的転換をもたらすものと、ならねばならない。

この「人」との関係での評価は、関係の変化の生じ方において、「物」との関係での評価とは異なっている。「物」との関係では、「関係わく」の明確化にともなう関係の分離や離脱が、物の分割や破棄として生じて、「人」との関係では生じない。生じないように展開してこそ、「人」との関係における評価活動である。それは、評価にともなう分離や離脱が、関係の統合・緊密化への発展をもたらすものとならねばならない。

関係内存在としての一者、たとえば保育者の、他者、たとえば保育活動を共にしている幼児についての評価は、両者の関係の統合・緊密化、幼児および保育者における諸関係の、統合・緊密化をもたらしべきである。この、関係内存在としての一者の、他者についての評価は、自己評価の意味をもつべき性質のものである。

関係内存在としての保育者が、特定の幼児に問題を見いだす場合には、それがどのような評価活動のもたらす認識であるかを、吟味しなければならない。関係内存在としての一者が他者においてとらえる問題性は、自己においても、それに対応する問題性が、とらえられるはずである。特定の幼児を問題児として認識する評価活動は、その保育者における問題の所在をも明らかにする。ここに、関係内存在における評価の、重大な意義がある。

関係内存在としての保育者は、関係を担う幼児に関して、どのような評価をしているか。「人」についての評価が、実は「物」についての評価にすり変わってはいないか。関係内発展をもたらしべき保育者が、関係わく外からの期待や働きかけに迎合して、関係の内的発展を規制し、ゆがめてはいないか。保育活動における内的発展への関係責任をもたない人たち、たとえば医学的診断や治療を目的としながらそれは隠して近づく医師の甘言にのり、実践活動を低めて、問題児の数をふやしてはいないか。あるいはまた、その研究が幼児に及ぼす影響についての配慮を欠き、事実

をゆがめてもそれが知らなければならないとして業績をあげようとする研究者との協力に走り、保育者でありながら、白紙で研究にのぞむなどと表明して、保育者としての責任や自覚を、喪失していることはないか。

これらのことに気づいて、痛手を受けるのは、保育者であり幼児たちである。社会の批判もまた、このような保育者に向けられることが多いのである。このことは、とくにはつきりと認識している必要がある。意図を隠して近づいた医師も、業績をあげるために協力を求めた研究者も、しばしば責任を回避する。それにはもっともらしい理由をあげ、われわれは保育者を尊重しており、幼児への悪影響があるかないかは、保育者の判断にまかせ、研究に不備があるならばこれまた保育者の加わった結果であり、それも保育者は承知でわれわれに同調しているのであるとすら、いうのである。このような関係状況では、保育者たちは関係的に搾取され、疎外され、幼児たちもまた、疎外されている。

幼児の人格形成は、幼児教育実践上の主要な課題である。このことは時代をこえてそうであると考えられるのに、とくにそれが今日強調されるとしたら、それは、幼児の世界にまで「人間疎外」がおよぼうとしているからであろうか。

子ども（幼児・児童）疎外の現象がみられる。

子どもたちが社会のきまりを守っていても命の失われる出来事

が、いく度となくおきる。平和な社会をつくる努力をする人たちなら、子どもたちをおきぎりにはしないはずである。おとなのことをまず考えて、そのおとなの生活がよくなるなければ、子どもはしあわせにならないという発想と、子どももおとなもふくめた全体の生活がよくなるなければ、子どもはしあわせにならないという発想、このふたつの発想からは、ちがう結果が導かれはしないか。社会がよくなるなければ子どもがしあわせにならないという、この主張は、社会が少しづつしかよくなるないあいだにも、子どもたちが大きくなっていく事実を、よく認識してその対策を打ちだすことができるか。

人間が外化される疎外されるとはどういうことか。(竹内良和解説「疎外される人間」昭和四十二年、平凡社、参照。)労働の生産物が、人間にとってよそよそしい独立な「他者」として現存し自主的な力となる。このような外化において、人間の生産物は、自己と離反し人間は自己の「他者」のなかに自己を喪失する。人間は疎外される。人間が、労働の生産物に、疎遠な対象に対するようにふるまう。

「関係」における疎外とは、どういうことか。(筆者序文「適応と変革」昭和三十六年、誠信書房。雨宮由里子「社会行動の一考察」(「関係における疎外」昭和四十二年、未発表論文参照。)関係の担い手としての個人が、関係責任をもってその関係の発展を

もたらさねばならない集団において、その役割をとることが困難になる状況。この関係における疎外は、成立している関係の成員において、関係体験の落差が著しく、緊張が生じ、その緊張を関係の担い手相互の関係によって、変化、発展させることが困難な場合に生じている。関係における疎外は、関係体験、関係認識、関係操作、関係洞察、関係責任の遂行などが困難で、関係が停滞・切断したり、発展の阻まれている場合に、生じている。

保育者の責務は、重大である。子どもの前で受け持ちの先生の悪口をいう親、両親を批判するのは古いものへの批判であり奨励すべきであるかのように教える教師、あなたがいまそうになっているのは祖母がそうしたと子どもに語りかけそういう立場で二年近く中学生向けの新聞に連載する大学の教授、そういう人たちに同調する保育者もまた、姿勢をたださねばならない。それだけでなく、関係における疎外と関係の深い問題、たとえば自閉的傾向などを子どもについて語る資格はない。

この稿の校正の段階で、早川元二氏の死を知った。波多野完治先生の「心理学と教育実践」(昭和四二年六月、金子書房)の結びに次のように書かれている。「早川氏がわたしの教え子だからというわけではないが、氏の容姿と氏の雄弁とは、この方面での、ジャーナリズムに特異の貢献をしつつあるように思われる」と。ここに哀悼の意を表する。